青　少　年　部　門

選評

ためらいの一拍

青山七恵

「かたち」は、「一拍おいてセミがないた。」という一拍の無音から始まる。自分の心のうちをなかなかかたちにできない主人公の周りには、チョークや水飛沫や上履きが言葉を誘い出すようにさまざまな生きた音を鳴らしている。友人の前でやっと彼女がぽろぽろと気持ちを吐き出す場面に、冒頭の無音の一拍がささやかな意味を持って重なる。思いを口に出すのは簡単なことではない。そんな素朴な実感が、打算や見栄を経由していない、真っ直ぐな回路で伝わってくる。言葉そのものよりも、気持ちを言葉にする前の一拍のためらいを大切に包んで差し出してくれるような、優しい作品だった。

「変わる」は、冒頭の「若いの」と「歳の」のかけあいがまず楽しい。短い作品ながら、奇想天外な発想が縮こまることなくのびのび発揮されていて、力みのない文章にはこの奇妙なストーリーを語るにふさわしい、なんともいえない妙なおかしみが滲んでいる。

「見ぬ世のヒトを友とする」は、老ドラゴンの棲みつく図書館というファンタジックな舞台をうまく活かして、書物を通した時を超えた交流を清々しく描く。記憶を取り戻し、天高く舞い上がる老ドラゴンの勇姿が印象的だった。

「県庁芸術推進課須賀健一」は、くすぶり公務員須賀健一のダメっぷりがチャーミングで、虚実混じったメタ構造を作者がノリノリで書いていることが伝わってくる。小説でおもしろいことをやってやろう、という頼もしい心意気を感じた。